

狭山丘陵における散乱ごみの実態と清掃活動に関する研究

○加藤健太郎 [東京農業大学] △栗田和弥 [東京農業大学]

キーワード：狭山丘陵、ごみ、清掃

狭山丘陵は、埼玉県と東京都の6市町にまたがり面積約3,500haが一体となって保全されている緑地である。狭山湖と多摩湖を囲み、雑木林と谷戸、畑、田んぼ等の里山環境が広がっている。カタクリやキンラン等の草花、キツネやタヌキ等の哺乳動物、オオタカやフクロウ等の鳥類をはじめ多くの動植物が棲息し、都市近郊の緑地としては豊かであり、一部は水源地でもあるために人の立入が規制されているために貴重な自然環境がまとまって維持されている。1960年代から緑地面積が減少したものの、緑を残したいと願う市民組織の努力等によって自然環境が守られてきた。また、一部は公有地化されて都市公園や野外博物館として保全されている。利用面ではジョギングやウォーキング等のレクリエーション、環境教育の場として利用される一方で、ごみの不法投棄などの問題を抱えている。そこで本研究では、ごみの問題の解決に向け、市民組織や公園を管理する組織等に狭山丘陵における清掃活動の実際をヒアリングにより明らかにした。次に、散乱ごみがどのような場所にあるのか現地調査を行い、散策路等のルートを中心としてその実態を地図上に布置した上で、ごみ等が捨てられやすい条件の整理を行った。

フロー体験の生成過程における相互作用に関する一考察

○ 迫俊道 [大阪商業大学]

心理学者のM・チクセントミハイは挑戦水準と技能水準の2つの座標軸から成り立つフローモデルを構築し、フロー体験が生成される過程、フロー体験の構成要素や特徴を提示してきている。チクセントミハイによるフロー研究の中で今後より精査が必要となってくるのは、フロー体験の生成過程における相互作用に関する議論ではないかと思われる。行為者と物理的環境との相互作用、行為者と他者との相互作用を伴うフロー体験について、それぞれを整理して考察する必要があると思われる。

チクセントミハイのフロー研究の中では集団におけるフロー体験について、外科医やバスケットボール選手のインタビュー結果が掲載されているが、共同体におけるフロー体験を主題として論じたものは社会学者の亀山佳明の『生成する身体社会学—スポーツ・パフォーマンス／フロー体験／リズム』に収められている論考以外には存在しないのではないかと思われる。共同体におけるフロー体験の相互作用を今後研究していくためにはどのような方向性が必要になってくるのであろうか、亀山により試みられているリズム論を中核に据えた研究、あるいはリズムと同様に個を超えた共同性を前提とした分析枠組みを援用し理論化を目指すことであろうか、相互作用の実態から理論化へと繋がっていくフロー研究の蓄積が不可欠であると思われる。